



アイヌ語で
「ひろば」の意味

ポイヤウンペの戦い ④

「金成マツ版 虎杖丸」から 文：瀧口夕美 絵：小笠原小夜

宝の刀 よろいくずす



育ての兄は猛毒男に飛びかかっていった。兄の体が猛毒男に二、三度ふれると、兄は骨までくさったようにボロボロにくだけて、ゆかにたおれた。次に若い方の兄、カムイオトプシがさけんで、猛毒男に飛びかかった。カムイの勇者もやはり、その骨をボロボロにくさらせてたおれた。育ての姉は最初に猛毒女に飛びつき、たがい上へ下へとふり回していたが、姉もその骨をボロボロにくさらせてたおれた。その場にいた者はそれぞれに戦ったが、同じようにやられた。

私、ポイヤウンペはついに立ち上がった。猛毒男の笑い声が割れるようにガラガラとひびく。見るものが二つにも三つにも見えるほどいかりが激しくなった。取っ組み合いを始めると、猛毒男はその体からふき出した毒の上に私をぐいぐいおしつけた。体のしんまでしびれ始めたが、戦いは互角と思えた。猛毒男の笑い声がひびく。「さあさあ、ポイヤウンペ、国をまたいで名をはせる者よ。オレはおまえに負けるはずではないのか？」

私はついに、クトゥネシリカ（宝物の刀）のつか（にぎる所）に両手をかけて強くつかみ、上下にゆらした。すると、クトゥネシリカのさや（カバー）にほられた竜の神が金色のウロコを逆立てた。そのウロコは刃がついた武器のようになっていた。私は武器となったさやを猛毒男につき立てた。岩のよろいは、次つぎとくずれ落ちた。

猛毒男はおどろき、激しく怒ってこう言った。「うわさのとおり、なんという強さ。先祖から受けついでこのよろいを打ちこわすとは！」。すると、そこに雲のよう



なかすみがか小さく立ち上った。かすみを手ではらって中心をみると、黄金のかぶとをしめた少年の大悪魔がいた。その顔つきは勇者そのもの。「私にかなうカムイはないはずなのに。ポイヤウンペ、本当の強さだ。しかし、おまえの体が助かることはあるまい」

私の体には強い毒のあわがついていて、少しの肉を残して、骨だけになっていた。強い毒のにおいに気が遠くなりながらも、クトゥネシリカのさやを強くにぎって、この大悪魔を二、三度なぐり、たたきつけたことを、夢のようにおぼえている。

幸いなことに目をさますと、私は海にうかんでいた。周りは血が川のように流れ、うずを巻いていた。やがて、海岸のほうからはっきりと通る声が聞こえた。「シヌタプカ村の私の弟、勇者よ。聞いてください。ここはランケベシ村です」

これまでのお話は「まなぶんデジタル」=QRコード=で読めます

